

私小説をめぐって

勝 又 浩

1

近頃は私小説のことばかり考えているので、ここでも私小説をめぐると、三の私見ということでお話し願う。で、まずは秋山駿の次のような文章から。

今日、カルチャースクールの小説を書く教室は女性によって全盛であるが、こんな国、こんな民族が、他に世界のどこにあるだろう？ あるまい、と私は思う。

日本語という言語の、生活への熟した浸透において、あるいは、日常的な生の断片を語るべき文学的に熟成された言葉を使えるのは、ほとんどすべて、私小説のおかげである。文部省がいくら逆立ちしたって、そんなことは出来なからう。

私小説は、日本独特の、誇るに足る文学である。（『私小説という人生』平成18年）

これは本のオビにも引かれている文章だが、まったくその通り、よくぞ言ってくれました、と心のうちで拍手をしたものだ。こういう事実をもっともっと日本の文学関係者は認識し、自覚すべきだと、私もずっと思っている。それで、こういう問題意識を起点にして言ってみたいことが次々と湧き上がってくるが、たとえば同人雑誌のことがある。

これも知る人、意識する人はほとんどないが、同人雑誌という「文化制度」も「日本独特の、誇るに足る文学」制度なのである。「文學界」の同人雑誌評を二〇余年続けた小松伸六がドイツに行ったとき、あちこちで話してみたが、ついに

理解してもらえなかったと言っている。西洋では、誰か個人が、時に資金面の援助や執筆協力者を得て始めることはあっても、人が集まって共同運営で雑誌を出すというのではないのだという。ここに詳しく論ずることはしないが、ただ面白いのは、中国のある時期、台湾、朝鮮、ブラジルにあつたりするが、想像できるように、それらはみな日本からの影響だつたり、日本人が嘖んでいたりしている。同人雑誌は日本独特の文化なのだ。もつとも俳句がハイクとして世界的文学になりつつある現在、これからは俳句結社も世界的に行われるようになるかもしれないが。

平成二五年現在、「文藝年鑑」に登録されている各種同人雑誌のうち、「小説・評論」と分類されている雑誌(団体)の数がおよそ二四〇種である。これは平成二〇年、「文學界」が五七年間続いた「同人雑誌評」欄——当然のことながらこういう文学制度も世界中で日本だけの現象である——を閉じるに当たって実施した全国アンケートでは三二〇誌が回答を寄せているから、それから五年の間に更に八〇誌が減少したことになる。若者の雑誌離れと同人雑誌の高齢化現象は既に一〇年以上前から言われ続けてきたことだが、それでも、「文學界」の同人雑誌評を引き継いだ「三田文学」編集部に送られてくる同時雑誌は年間五〇〇冊くらいで、それはここ

二、三年変らないようだから、減少はほぼ底止まりに来たと思いたい。いや、減少はまだ続くとしても、ゼロになることは、先ず絶対にならないと言えるだろう。というのは、一方に次のような事実もあるからだ。

「文藝年鑑」には前記「小説・評論」類雑誌の他にも詩、短歌、俳句ジャンルの同人誌(団体)が登録されている。その数は、詩が二一〇誌(団体)、短歌が一九五誌(結社)、俳句が二五五誌(結社)である。これらの数字が多いのか少ないのか、増えているのか減っているのか、残念ながら私には分からないが、増減は別にしても、これ自体面白いデータではないだろうか。

前記、秋山駿の言うとおり、日本全国の都市都市にカルチャースクールの類があつて、そこにほとんど文章教室を初め短歌、俳句、小説教室があることも、世界から見れば不思議な日本の現象であるだろうが、それは、実は日本には昔からあつた短歌俳句結社の伝統から自然に派生してきた現代的な在り方なのだ。小説も詩も明治になって外国から入って来たものだが、日本人はそれをたちまち、永年短歌俳句で培ってきた仕方、自分たちの生活のなかに取り込んでしまったのである。近代文学最初の同人雑誌である尾崎紅葉の『我楽多文庫』について、私は別のところでそうした事実を調べて報

告したことがある。同人雑誌という名称自体は大正の中期、ちやうど私小説がそういう名で呼ばれるようになったのと同じ頃、言われるようになったのだが秋山駿の言う、「日本語という言語の、生活への熟した浸透において、あるいは、日常的な生の断片を語るとき文学的に熟成された言葉を使えるのは、ほとんどすべて、私小説のおかげである」というところは、実は「私小説」の前に「短歌俳句のおかげである」と入るべきであろう。「私小説」はその短歌俳句の伝統のなから、自ずから生まれ、育つて来たのだ、と。私の考えでは、日本が同人雑誌文化の国であるという事実と、私小説を作り上げてきた国であるという事実は、一つの根から出ている二つの枝なのだが、さて、そのことが旨く言えるかどうか。

2

私小説とは何か、それは何時、何によつて生まれたのか——こうした問題をめぐつてこれまで行われてきた議論を大別すると、だいたい次の三種に分けられるであろう。

一つは、それを日本の近代文学史のなかに尋ねようとする見方で、現場を見てきた人としての正宗白鳥や宇野浩二、さらに文学史家、批評家としての中村光夫や平野謙などの言説に代表されるであろう。二つめは、日本の文学史からは離れ

て、もっと広く文化や社会の問題、また文学の本質論から考察しようとするもので、小林秀雄『私小説論』などがその代表である。三つめは近年の傾向だが、私小説という枠組みをひとまず外して、告白や自己語り、自己言及や自意識表現の問題など、表現技法やその歴史のなかで私小説も捉え直そうとするもの。ひと頃の外国人による私小説研究に続いて、近年若い人たちからこうした研究が陸續と出現していて、私小説の読み方がだんだん作家論的な枠組みから自由になっていくことを、私は興味深く見ている。

ついでに言えば、一つめの、私小説の淵源を文学史のなかに、誰か特定の個人や作品に求めようとする説は、現代ではほとんど意味がなくなっていると言つてよいであろう。田山花袋や近松秋江が私小説を発明したわけではないのだ。彼らにそういうものを書かせることになった文化的な地盤こそが考察されなければならないだろう。私は、花袋の『蒲団』も日本の文学伝統の方から見れば「竹中時雄日記」に過ぎないと何度か言つてきた。

そんなわけで私の関心はもつぱら二つめの、日本の文学伝統と私小説との関連という問題に向うが、それは裏から見れば小林秀雄の影響がそれだけ大きかつたということかもしれない。ただ、現在の私から見ると、小林秀雄『私小説論』は、

考えるべき良きヒントはたくさんあるにしても、折角よい問題を立てながら思考の方向がずれたり飛躍したりと、全体として失考が大きいから、最終的には捨てた方がよいと思つている。そのためには、これを読めば小林秀雄『私小説論』はもう読まなくてよい、というような私自身の私小説論を提示したいものだと思つているが、なかなかそうは行かなくて、こうして蠅螂の斧を空しく振り回し続けている。

以下、小林秀雄『私小説論』から、例として二、三の問題をあげてみよう。

『私小説論』はルソー『告白録』の引用から始まつている。人間の「告白」という行為が意味を持つのは、社会のなかに個人という存在がそれなりに認められるようになったからだと言ひ、ルソーの『告白録』に近代の精神と近代の文学草創の象徴を見ているわけだ。そして、そこから展開して、よく知られた「社会化した『私』」という概念が言われることになる。同じ「私」を描いても、西洋の小説の「私」にはその先に社会が見えるけれど、日本の小説の「私」はみな「作家の顔立ち」になつてしまふ。それは、日本には未だ「封建的残渣」が多すぎて「近代市民社会」が未成熟、それゆゑ作家たちが「社会化された『私』」を獲得できないからだ、というのである。そこから、『私小説論』結末のよく引用される

一節、「私小説は亡びたが、人々は『私』を征服しただろうか。私小説はまた新しい形で現れて来るだろう」のことも生まれて来たわけだ。ここで「私小説は亡びたが」というのは、今から見るとその後の歴史的な事実には合わないようだが、小林秀雄がこう書いたときは、プロレタリア文学系の思想小説、観念小説に彼なりの期待があつた、そんな時代の痕跡なのである。

こうした簡単な要約からでも、まず、文化史のなかの「告白」ということが、必ずしも近代社会だけの産物でも現象でもないという事実を言わなければならない。それは、いま細かいことは省略するが、ルソー『告白録』（一七七〇年）よりも千年も前に、日本には道綱の母の『かげろふ日記』（九七四年頃）という大文学がある事実だけでも充分わかることだ。『かげろふ日記』の存在を、万事大仰なルソーに教えてやったら腰を抜かすだろうと言つてもよいが、決定的には小林秀雄が知っていたら『私小説論』は現在あるものとは全然違った展開を見せていただろう。

もう一つは、「社会化された『私』」だが、これも小林秀雄の近代主義、あるいは西洋コンプレックスの産物なのだろう。それをフロアベールに絡めて、「私生活では一遍死んだ『私』」だとか、彼はさまざまに説明をつくしているが、私

には概念の混乱があるとしか見えない。「私」の「社会化」などは、それ自体には近代も前近代もない。封建時代には封建時代なりの「私」の「社会化」があることは、歌舞伎を觀ても時代劇映画を觀ても分かることだ。子供の頃、白人騎兵隊に次々に殺されてゆく「インディアン」の、その村の酋長が本場に偉い人物に見えたものだが、「近代市民社会」だけが「社会化された『私』」をつくりあげるわけではないのだ。小林秀雄自身の書いたものによっても、正宗白鳥でも菊池寛でも、彼の周りにも、時の日本社会のなかで充分に「社会化した『私』」の体現者がいたはずだし、後には本居宣長という江戸の「大人」に打つかつて行ったのではないだろうか。言い換えれば、どんな時代、どんな社会にも、つまり日本には日本なりの「社会化された『私』」が存在するのだが、それを、ルソーやフローベールといったモデルでしか測れなかつたところに、『私小説論』の限界があつたと言つてよいであらう。

3

『私小説論』のこうした読みや判断の果てに、私がいま考へているのは、小林秀雄に欠落していた日本語の問題である。一口に言つてしまえば、日本語が、その性格が私小説も生み

出し、作り上げたのである。もう一步退つて言えば、日本語が日本文芸をつくりあげたのであり、もつと遡つていえば、日本語が日本人の思考法や感性をつくり、日本語が日本人の自我の形もつくつていくという事実、そして私小説もそこから生まれた、ということである。

先ほどは「告白」という行為が日本では西洋より千年も前から文学様式として成立していたと言つたが、それと一緒に、西洋では一五世紀になつて初めて現れた日記が、日本では八世紀には既に文学様式の一つの原型として成立していた、という事実もある。さらに、これは小林秀雄も書いているが、西洋ではエッセーというジャンルが成立したのがモンテーニュ『随想録』(一五八八年)以来のことだが、それに対して日本では、『随想録』より二五〇年も前に『徒然草』が書かれていて、随筆なるジャンルができあがつていた。こうして日本の純文学——子供の読むとされた物語類もあつたから——の根底には日記と随筆と和歌の永い伝統ができあがつていたのである。そしてその伝統は、言うまでもなく日本語の性格から生まれ、日本語の性格がつくりあげたものに他ならない。そういう永い伝統を持つ国に、明治になつて突然入つてきたのが、坪内逍遙も驚いて『小説神髓』を書くことになつた「ノベル」なのだ。だが、そのノベルを、五〇年もしない

うちにたちまち消化して、わが身に合った、永い伝統にも適ったスタイルに改良した——西洋基準でしか文学を考えない人には改悪であるが——それが私小説だ、という次第である。

これが、いま私の考えている、私小説の生まれてくるまでの道筋、その生い立ち物語の粗筋である。しかし、こう言っただけでは、何だか国粹主義者の寝言みたいで誰も信じてはくれないだろう。この粗筋に肉付けして誰にも分かってもらえるような物語にするためには、少なくとも書籍一冊分くらいのことが必要で、目下そのために苦労している最中でもある。だから詳細はそちらを見てくださいと言いたいが、言い出した手前、ここでは日本語の性格について、その核心部分だけを一、二記しておこう。

「日本語に主語はいらない」とは、この頃は大方行きわたって来て、その趣旨の本もよく見るようになった。しかし、それを言う人がおおむねは語学関係、とくに英語圏の人たちなのが、私にはもう一つ物足りない。問題がしばしば文法論や翻訳上の話に終わって、文化の問題にまでは入ってゆかないからである。だが、言語の問題は、当然のことながら人間の思考の問題であり、感性の問題、文学の問題でもあり、社会の問題、人間の自我の問題でもあるのだ。

日本語には、英語が必要とするような主語が必要なく、主

語なしの文章構造があるから、それ故に和歌が生まれ俳句がつくられ、次々に主語の移る連句も可能になった。そのことは、外国語に翻訳された短歌や俳句を見れば一目瞭然だし、また、西洋人のつくったハイクと称するものが、しばしば名詞を羅列しただけに終わっている事実を見ても分かるだろう。主語のはずせない言語では、厳密には歌や俳句は困難なのだ。むろん、だからいけない、というのではない。良し悪しの問題でもない。ちやうど柔道がスポーツとして世界に広まるのとともに、元来あった「道」の精神を失ったように、俳句もハイクになつて変質しているのだ。

もう一つ、日本語は主語が要らないだけではない、それと連動して、日本語には主語となるべき固定した一人称がないのだ。我々は日常、勤め先では「私」、飲み屋にでも行けば「俺」「僕」、家に還れば「お父さん」などと自称詞を使い分けている。文章を書けば「筆者」「論者」「引用者」などと、普段とは全く違う自称詞を工夫することさえある。つまり、日本語には自称詞が無数にあり、創作することさえできるのだが、逆に言えば、固定した自称詞がないということである。その事実をさらに言い換えれば、日本語の自称詞はすべてそのときの相手や場によって支配され流動するのだ。そして、日本語のその性格は、そのまま日本人の自我意識もつくって

いる。それゆえ日本では、どんなときにも相手に、多数に、その場の空気にあわせて自分をひっこめるのが美德であり、それが日本の「社会化された『私』」でもあるが、外国人にもつとも分かりにくいのがその点だろう。インド・ヨーロッパ語、中国語圏の人たちには、つまり常に主語が必要な国々の人たちは、他人が何と言おうが思おうが、自分を主張し押し貫くことこそが良心的な行為でもあるのだ。西洋ではデカルト以来、「われ思うゆえに我あり」が人間存在の原理だが、日本では兼好法師以来、「われらが心に念念のほしきままに來り浮ぶも、心といふものの無きにやあらむ」、つまりわれ思うゆえに我なし、なのである。日本語で生活していれば、自我というものを日々こんなふうを意識し、自覚し、そこから文学も営んでゆくわけだ。

もう一度、冒頭に引いた秋山駿のことばに戻れば——「日本語という言語の、生活への熟した浸透において、あるいは、日常的な生の断片を語るとき文学に熟成された言葉を使えるのは、ほとんどすべて、私小説のおかげである。文部省がいくら逆立ちしたって、そんなことは出来なからう」と。ここで秋山駿は途中を端折っているが、「すべて、私小説のおかげである」の「私小説」のところには、同時に「日本語のおかげ」、またその「日本語が作り上げてきた日記、隨筆、短

歌、俳句のおかげ」だと、入れなければならぬであろう。そしてついでに言えば、「文部省がいくら逆立ちしたって」の「文部省」のところにも、「中村光夫が」「桑原武夫が」「戦後派の批評が」等々と補っておくのもよいだろう。

(かつまた・ひろし)